

もう一つの祇園祭

神泉苑

◆神泉苑

神泉苑は、禁苑として権威の象徴であり、また、雨乞いなどの儀式の場ともなる。元長元年（824）の西寺の守敏と東寺の空海との祈雨の争いで空海が竜を呼び勝った話は有名。後白河法皇が、白拍子に祈雨の舞をさせ、最後の白拍子でやっと雨が降り、「日本一」と称された白拍子が静御前で、義経が一目ぼれをしたというエピソードが伝わっている。貞観5年（863）この地で盛大に御霊会が催され、11年には66本の矛を立て、疫病退散を祈願、後に車や飾りをつけ、祇園御霊会の巡行になったと言われている。

江戸時代、徳川幕府はこの地の豊かな水に着目して「二条城」を建設。荒廃していた堂塔などを整備し、旧跡保存に努める。また、弘法大師との旧縁により管理を東寺に委ね、末寺になる。（でも鳥居は残っている）

神泉苑は平安京時代と同じ場所にあり、東寺と並び貴重な遺跡として国の文化財の指定を受けている。

御池通

堀川通

御供社●

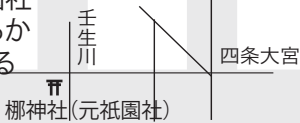
◆御供社

素戔鳴尊、櫛稲田姫命、八柱御子神を御祭神とする八坂神社の境外末社。四条寺町東の御旅所に対して、又旅所とも呼ばれる。三条大宮の地にあり、平安京の神泉苑の南東端に位置する。貞観11年（869）都に疫病が流行した時、当時の国と同数の66本の矛を立て、祇園社の神輿を迎え、祇園御霊会が行われたところで、その名残として、7月24日の御供祭の際に鳥居の向って右に「オハケ」が立てられる。水辺を表す芝生に御供社の御祭の依り代である御幣3本が立てられたものである。又、康和5年（1103）以来、還幸の際にこの地で神輿が合流し朝廷から祭の行列の点検を受け、「列見の辻」とも呼ばれている。

◆椰神社（元祇園社）

壬生寺の近く壬生椰ノ宮町に位置する。貞観11年（869）疫病が流行。牛頭天王（素戔鳴尊）の神霊を播磨国・広峯から勧請して鎮疫祭を行った際、牛頭天王の分霊を乗せた神輿を椰の林中で祀ったことに始まるという。後に神霊を八坂に遷祀し今の八坂神社が創建された時、住民は花飾りの風流傘を立て、鉾を振り樂を奏しながら神輿を送ったといい、これが祇園会の起源であるとされる。八坂神社の古址にあたるので「元祇園社」とも呼ばれる。

＊播磨広峯神社と八坂神社とは祇園社（牛頭天王社）の元宮・総本社はどちらかという本社争いが今なおくすぶっている



解答

- ① (ウ) ② (イ) ③ (ア)
④ (エ) ⑤ (ア)
⑥ 祇園御霊会(祇園会) ⑦ 石見神楽
⑧ 蟻螂山 ⑨ 久世駒形稚児 ⑩ 鉾鉾差し

◆御神輿巡幸

7月17日の山鉾巡行が終わったその日の夕方、八坂神社を3基の神輿が出発。氏子区内を巡幸し、お旅所に入る。それが神幸祭です。各々屋根の形が違い、中御座（六角形、牛頭天王）、東御座（四角形、八王子）、西御座（八角形、姫神）という。後白河院が寄進したという記録がある。二箇所あったお旅所は、秀吉が御土居を造った時に統合した。四条橋を封鎖したため、神輿は三条橋に迂回。（現在も17日は渡らない）疫神を祓う神輿の巡幸が祭礼の中心の為、広い範囲の氏子区域を巡ることで、神の力を人々にもたらし、厄神を集められるとされる。24日その神輿が八坂神社にもどる。その巡幸を還幸祭といい、今年は神輿の巡幸（もう一つの祇園祭）にも注目するのも面白い。

都草抄

◆尾張津島天王祭

各地には様々なお祭りがある。永い日本の歴史と共にそれらも発展や衰退を宿命としている。伝統なるが故に町々には私の町の祭りこそ日本一だと言い、またこんな所が他には無いのだと誇りに思っている。

戦国の世には信長も目にした曳山祭（山車のある祭り）が『尾張津島天王祭』である。7月28日（宵宮）29日（朝祭り）に名古屋近くの木曽川下流にある天王川を堰止めた河畔で行われる。津島神社は京都の八坂神社の定紋と同じで、朱塗りの社殿と緑の木々の美しさの中に茅の輪くぐりをする人達で賑わっていた。宵宮は五艘のまきわら船が夜祭の主役でこの山車舟は7時頃から燈が灯る。一年を表す365個の提灯を半円山型に飾り、その中央に一年の月の数12個の提灯を真直ぐに建てお旅所の岸まで宮入する。花火もあり典雅な笛の音と心地よい川風の中、この提灯飾りの山車舟は美しい。翌日の朝は一転する。一番先のダンジリ舟（市江車）は、装束の置物人形を上段に配し、金糸銀糸の刺繍幕を廻らし、小袖幕には能装束を十数着まき被せ、左右に紅白の梅の枝が配してある。船首の十人の鉾持ちの若者が水中に飛び込んで、お旅所まで泳ぎ、神輿に拝礼し、神社へ走り込む布鉾奉納の神事がある。他の五艘の山車舟も能に因んだ人形を頂き、稚児を乗せて随従する様は水の祇園祭で土地の人は『東の祇園祭』と言っている。

（投稿：林 義夫会員）

◆大船鉾

船鉾は、「応仁の乱」以前に起源をもち二基あった。現存の船鉾は、先祭のしんがりを勤め「出陣の船鉾」であるのに対し、大船鉾は後祭のしんがりを飾り「凱旋の船鉾」と称された。舳先に2メートルも的大金幣（現在）を揚げた優美な姿だったとされているが、元治元年（1864）の「蛤御門の変（禁門の変）」により、鉾の木枠や車輪など大部分を焼失。その後は残った御神体である神功皇后の御尊面、大金幣

、刺繍幕をはじめとする懸装品を飾る居祭が100年以上継承されてきたが、その居祭も中止となってしまった。

しかし、若手有志が大船鉾の囃子を復活させ、現在宵々山から宵山にかけ、かつて大船鉾のあった四条町においてお囃子を行っている。昨年、大船鉾懸装品121点が、京都市の有形民俗文化財に指定された。

四条通

大船鉾

◆粟田神社

もとは「感神院新宮」といい、八坂神社は「感神院祇園社」という。共に牛頭天王を祀り神紋も同じ木瓜紋と三つ巴紋である。十月の粟田祭の際鉾の巡行があり祇園祭の原型といわれている。現在町内に十七基あるが差し手の不足等で昨今は六基のみ巡行している。御神宝の「阿古陀鉾」は青蓮院に伝わる文書によると後花園院の嘉吉元年本宮から下された三基の鉾の一つ。大祭前夜の渡り神事は瓜生石の前で神官と知恩院の僧侶が、神幸祭では青蓮院の四脚門が開き（この日と天皇行幸時のみ）神輿が寺境内に入り神事を行う（非公開）。神仏混淆の儀式で興味深い。



◆六角堂

六角堂は応仁の乱後、庶民信仰の場となり、上京の革堂に対する下京の町堂として、町組代表者の集会所の役割を果たすようになる。祇園祭山鉾巡行の先陣争いが絶えなかった為、応仁の乱後から巡行の順番をクジで決めるようになる。江戸時代、町民の集会場でもある六角堂で、雑色立ち会いのもとでクジ取り式が行われ、京都所司代の花押のある「クジ証」が渡されていた。明治以降は府庁や市役所で行われ戦後の混乱期に八坂神社でもクジ取り式が行われていたらしい。昭和28年からは京都市の議場となっている。興味深いのは、明治6年の太陽暦が採用により7月17日、24日をもって恒久的に祭日と決定された事、同じく明治6年皇女和宮が亡くなる4年前、寺町春長寺で前祭を上覧されている事である。

六角堂

烏丸通

三条通

室町通

◆御旅所

現在、四条寺町にある八坂神社御旅所には、スサノヲノミコトを祀った大政所殿・少将井殿・冠者殿の三社がある。「祇園会記録」第一巻御旅所社家の記によれば、神託に依り、秦助正なるもの、邸内に御旅所を作することを認められ、以後毎年、祇園神輿の渡御が行われた。これが、大政所殿である。少将井殿も、祇園別宮と呼ばれ、やはり神託に依り、毎年神幸があった。これら御旅所は、秀吉の京都改造により、現在地に移転するが、御旅所旧地として、烏丸高辻上ルに「大政所町」、烏丸夷川上ルに「少将井町」の地名が残る。社の最西にある冠者殿社は、もと、大政所とともにあったが、天正19年の移転の際には、下京区冠者殿町（万寿寺通高倉東入）に移り、さらに、慶長の初めになって、現在地に合祀された。俗説には、この冠者殿社には、源頼朝の家来、土佐坊昌俊の霊を祀るともいわれ、彼の有名な伝説から、起請返し神、誓文払いの神と信じられるに至った。